

サーフィン

Surfing

① 競技概要

サーフィンは、サーフボードに乗ってバランスをとりながら水面を進み海上の波を利用して様々な演技を行い、その出来映えを競う水上スポーツである(図1)。

競技会のクラスは年齢と技術レベルの違いで分けられる。例えば、全日本サーフィン選手権は年齢別で競技が行われる大会である。一方、全日本級別サーフィン選手権は技術レベル別の大会である。

大会では、選手はゼッケンを着用し、限られた時間内に波に乗って演技をする。1ヒート(大会組み合わせ)には平均4~5人が参加し、上位2人の勝ち抜き戦で行われる。

ヘッドジャッジ1人とジャッジ4~5人が10点満点で採点し、そのうち最も高い得点と低い得点をカットした残りのジャッジの点数を平均したものが、その試技の得点となる。何本か試技を行ったうちで得点の高い2本の合計点で順位が決まる。日本サーフィン連盟(Nippon Surfing Association: NSA)のルールでは、1ヒート13~18分、マキシマムウェーブ(1ヒートの最大ライディング数)8本でベスト2ウェーブが平均的に運用されている。

また、妨害を禁止するルールがあり、インサイドに最も近くにいる選手がターンし、その方向に優先権をもつ選手のライディングを妨げた場合は妨害と

判定され、2番目に高得点だったウェーブの得点の1/2がカットされる。

高い得点のライディングは「よりよい波で、最も難易度が高く、そしてコントロールされたマニューバー(技の構成)を実行するライディング」である。

大きな大会では、ジャッジングにコンピューターの導入が進み、大会をみる側にも同時経過がわかるので競技性が高くなり、サーフィン競技を行う楽しみに加えて、新たにみる楽しみも増している。

② 歴史

このスポーツを考案したのはハワイやタヒチに住んでいた古代ポリネシアの人々で、西暦400年頃にはサーフィンの原形のようなものがすでに存在していたようである。

漁業の技術の1つであったその「波乗り」が、いつのまにかあまりの楽しさのために娯楽として独り歩きを始めた。そしてカヌーは次第に小さくなり、オロとかアライアと呼ばれるサーフボードの原形が誕生したのだといわれている。

近代サーフィンの父として、ハワイのデューク・カハナモク(Duke Kahanamoku)は欠かせない人物である。サーファーとして、そしてスイマーとして卓越した技術をもっていたデュークは、1912年に第5回オリンピック大会(ストックホルム)の競泳男子100m自由形で金メダルを獲得して一躍世界的なスターとなり、世界各地でチャンスがあればサーフィンをしてこのすばらしいスポーツの普及に努めた。

日本のサーフィンが産声を上げたのは1960(昭和35)年の頃で、アメリカ人が相模湾や千葉の海でサーフィンを楽しんでいるのを地元の少年たちが模倣したのが最初だといわれている。

1965(昭和40)年には日本サーフィン連盟(Nippon Surfing Association: NSA)が発足し、翌年の7月には千葉県鴨川で第1回の全日本選手権が99名の選手の参加で行われた。2009(平成21)年の大

会には、約850人もの選手が参加している。

また、現在では日本プロサーフィン連盟(Japan Pro Surfing Association: JPSA)、ASPジャパン(世界プロサーフィン連盟[Association of Surfing Professionals]日本支部)、日本プロフェッショナルボディボーディング連盟(Japan Professional Bodyboarding Association: JPBA)などのプロ団体が存在する。

(飯尾 進)

サウンドテーブルテニス

Sound table tennis

① 競技概要

サウンドテーブルテニスは、視覚障がいのある人の卓球競技で、ラバーのない木製のラケットを使い、音の出るボールを打ち合う競技である(図1)。「盲人卓球」という名称で親しまれてきたが、2002(平成14)年4月より「サウンドテーブルテニス」と改称された。

ボールは、卓球で使用される球の中に直径4mm程度の金属球が4個入ったもの(重量3.6~3.8g)を使用し、弾ませるのではなく、卓球台の上を転がしてプレイする。ネットは、ボールネットの下を通過するように、台から4.2cm上の位置に張られ、台の大きさは、長さ274cm×幅152.5cmで、高さは床より76cmである。台の両エンドとエンドからネットに向かって60cmのサイド部分には、高さ1.5cm、厚さ1cmのフレームが取り付けられている。また、



図1 競技中の様子：サウンドテーブルテニス

センターラインの位置を示すために、エンドフレームの外側に突起物を付けるなど、視覚障がいに対する配慮がなされている。

競技は、日本卓球協会制定の「日本卓球ルール」に準じて実施するが、本競技特有のルールも存在する。例えば、サーバーはサービスを打つ際に行きます」と声を出して合図し、レシーバーは「はい」と返事をしなければならない。また、プレイヤーは競技の公平性のためにアイマスク(眼帯)を着用する。

わが国では、盲学校(視覚障害特別支援学校)や、各地の障害者スポーツセンターを中心に、広く楽しまれている。

② 歴史

起源については明確ではないが、「栃木県足利盲学校長の沢田正好が盲人用ピンポンを創案し、1933(昭和8)年の帝国盲教育研究大会の際公表したが、そのルールはだいたい現在のものに近いものであったところからみて、沢田が盲人卓球の創案者であったかも知れない」(世界盲人百科事典編集委員会編『世界盲人百科事典』日本ライトハウス1972、167~68)という記述がある。

全国規模の大会は、1965(昭和40)年に開催された第1回全国身体障害者スポーツ大会(現・全国障害者スポーツ大会)が最初とされ、現在も正式種目として実施されている。1997(平成9)年には、日本障がい者スポーツ協会加盟の日本視覚障害者卓球連盟が設立された。

なお、この競技は日本独自のもので、国際組織や国際大会は存在していない。

参考文献

- 日本視覚障害者卓球連盟編 2011、『サウンドテーブルテニスルールブック2011年度版』日本盲人会連合
- 日本障がい者スポーツ協会編 2008、『全国障害者スポーツ大会競技規則集』日本障がい者スポーツ協会

(原田清生)

サッカー

Football; Soccer

① 競技概要

サッカーは、1つのボールを2チームが奪い合い、手や腕を用いることなく、相手ゴールにボールをより多く入れる



図1 競技中の様子：サッカー(写真：フォート・キシモト)個人プレイとチームプレイの両面に高度な技術と戦術が求められる。

ことを競い合うスポーツである(図1)。5人制のフットサルや8人制(7~9人制)などもあるが、通常サッカー(正式名称アソシエーションフットボール: Association football)といえ、11人制の競技をさす。

[競技の特性]

サッカーは、2チームが同一の競技場(ピッチ)上で入り乱れ、ドリブルやヘディングでボール操作を行い、相手コートに侵入し、シュートを放ち、一定時間内に相手チームより多くの得点を競い合うゴール型の球技である。ボールや競技場の大きさ、そして競技時間の長さをプレイヤーの発育発達に合わせた様々なゲームのバリエーションがある。

しかし、時代や国、そして競技レベル、あるいはルールが変わろうとも、攻撃ではゴール前の空いた空間に走り込んだり、相手チームのマークをはずしてフリーになり、相手チームのゴールにボールをシュートして入れる。守備ではボール保持者をマークしたり、個人やグループあるいはチームで協力して、相手チームにパスやドリブル、シュートを容易に行かせないという競技特性は変わらない。

[競技の仕方]

ここでは11人制について述べる。この競技は11人ずつ2のチームで行う。ゴールキーパー以外のプレイヤーはインプレイ中に手・腕でボールを扱うことはできない。

競技は前半と後半各45分で行われ、あらかじめ登録してある選手の中から

3名まで交代可能というのが一般的である。しかし、年齢、試合の位置づけ等に応じて競技時間や交代人数など柔軟に行うことが可能である。

試合開始は、キックオフと呼ばれ、ボールをセンターサークル中央(センターマーク)からキックされたボールが前方に移動した時に「インプレイ」となる。ボールがタッチラインやゴールラインを割った場合、最後にボールに触れた選手の相手側のチームからのスローイン、あるいはゴールキック、コーナーキックで再開される。審判は1人の主審(レフェリー)と2人の副審(アシスタントレフェリー)によって行われ、副審(かつてラインズマンと呼ばれていた)はアウトオブプレイ(ボールがフィールド外に出ること)の判断やオフサイド、主審の視野外でのファウルの判定などにおいて主審を補佐する。

オフサイドとは、簡単にいえば「待ち伏せ」を禁止したルールで、味方のプレイヤーがボールを蹴る瞬間にディフェンスの選手を結んだラインよりゴール側にはいけないというものがある。ボールより前方の選手は味方プレイヤーがプレイする瞬間に、自分よりも相手ゴール側に相手選手が2人以上いない状況で、プレイや相手プレイヤーに積極的に干渉し、その位置にいることによる利益を受けるとオフサイドの反則となる(※いくつかの例外規定がある。詳細は日本サッカー協会発行のルールブックを参照のこと)。

ファウルに関しては非常にシンプル